伊地知文庫
文庫20
350

伊地知文庫
文庫20
350

俳諧句選 冊

伊地知氏書册

文庫20
350

孤法師

藏書

逸世何羅自序

乃是逸世乃ち孤法師の
うちなる弟子なり
さのあのかもの海きをもとめて
ようやく神風やいせの海際

山路の雪をあるくさま

嶺の花園のわらべのい業末の

ゆくうぐいすのいくたび花の業へ越

おひ立ちまわ岩屋さきふかし

ろ業人つ小ものあまとてのりて

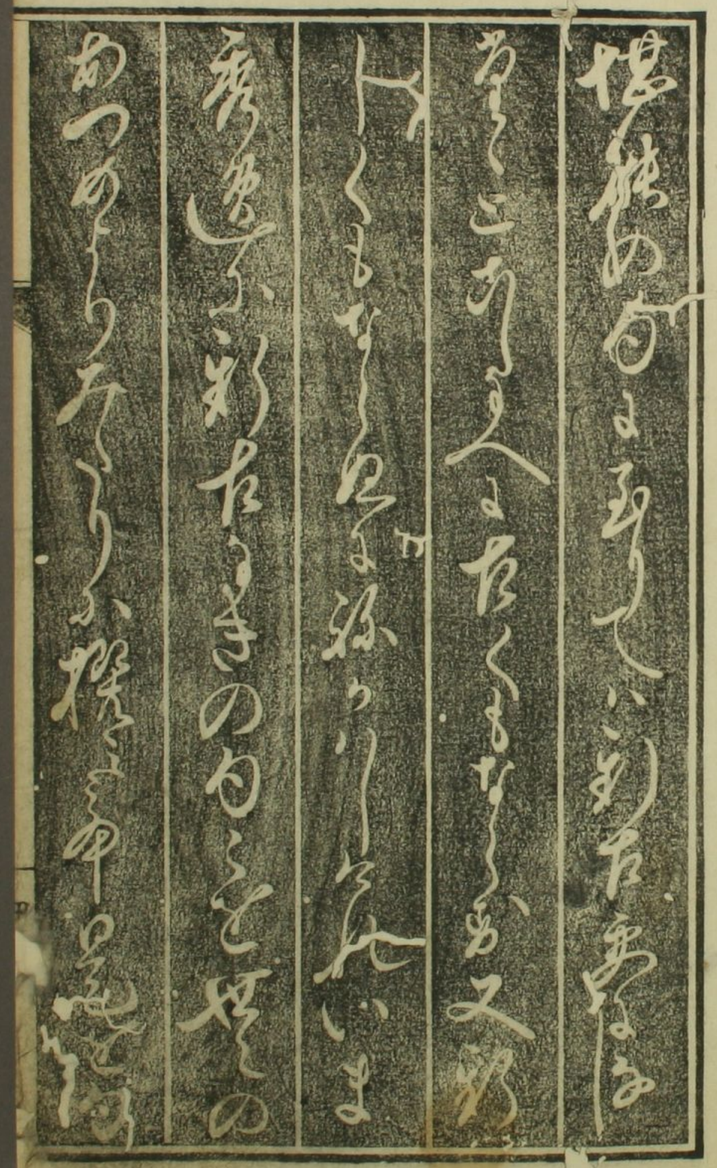
京祇陸の流派の発句の格

此の百韻等は流乃を銀

ゆくまもいちにちの

雲の石頭高祇宣石高雨

鶴一羽世のもと業て蘇勝



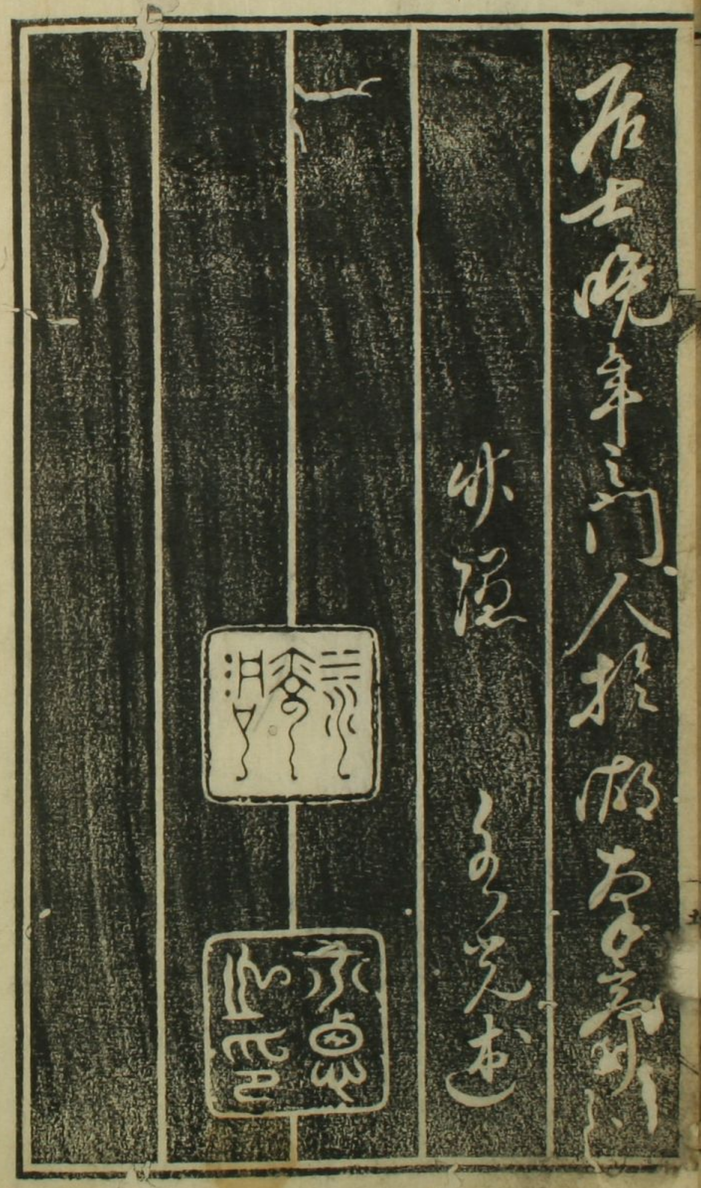
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



句選語類兩篇標出引用之書

宗鑑犬筑波
貞德戴恩記
同御傘
新續犬筑波
毛吹艸
崑山集
德元初學抄
季吟埋木
滑稽太平記
守武千句
同淀河油糟
鷹筑波
犬子集
久流留
玉海集
立圃明鏡
武藏曲
江戸三吟

芭蕉翁二十五ヶ條　曠野
猿蓑　續猿蓑
奥細道　續虚栗
其角雜談集　同句兄弟
誹番匠　田舍句合
嵐雪其袋　治德一字幽蘭集
祇空朽葉集　鷄筑波

一師傳秘する所の書こ神をのそく
一天の物疑さる為婦て原本編なる永録四
年十月十五日しる書もしるたるハ連歌の天

水ハ貞室の手ゟ利生なるあ神ゟ良德の
手ゟ出さるを原本ゟ
一季立ハ誹ゟ於て季吟四季乃詞ゟ善なるハ
なし見合ゟハ温故日録可ハ
一貞德の句利鈍ゟ紀ゟあるを絶ゟ是上國の武
庫ゟ書頭九ゟ家ゟ天水良藥長良ゟ姫
三五十三ヶ條等乃書あり
一芭蕉此道の氣格を失ひて弧横頻婦伝
その妙ゟ猿於其角伊ゟ彊弩の末英雄人を
欺むくゝいるゟあた神利

祇園白醤

東都　祇園編選

定家つ

ちるこをおいてゆくあきしかな

信尋公近衛

さくらばなちるこのもとのあきかぜに

芝廣つ舊丸

ちるさくらあとをとめてゆくあきかな

宗祇法師　種玉庵

落白ゆ　嘉八年双のちすすのこ

この山関よりふ
本の山ちまふしの咲
こうとゝそこし吟し
のかりうや
崑山集ニ貞徳翁ノ
こうなりふりあり
かけや康寺なり八
幡と萩の花ちるを
八情の武部へきて
見むかし萩の坊
まて宗祇の句や
とかさはしと
九だり人の作りも
りうけ
八情そいさきる
萩の花みれ
とい寺かやしたし
より聖こゝとなる
作りし

関こえて宿も為しろとさゝの那

八情萩の坊にて

あさかやの康寺の何かるとさら紀の坊

宗長

宗長説くも紀行多し
あづま日記

行衛のつゐてよ伊勢の国
関地蔵とゆふ所にとまりて
何かしに庭の橋の花さかり
なりけれは

橋ばかりにてもらう萩の露

墨佐 櫻井

あさかりよたゞ寄ぬとも川のかけかな

兼載

景盛ニ初中後ノ八說話
ニも通スへし

ちしやふれ
竹馬狂吟抄ニあり
涼しさよ
玉海集ニ茶ひと
東山遊覧紀行
可祇園の作なり
新ニ作ら桜桃の
作り立やらむ
るゝ折 友人
をまろ作りうち
紹巴ほしまいて
あさきはして
平まれ 通りゝ
作る
前人遠寺所の
それのよみ何なり
作もとも
かくし
年

茶よりも実こそ作し心蛙さく銅

玄旨 幽斎ニ任法印

花遅りし蛙用あるらむ
て雨中年

よしやふる飛交八いくしくと花の雨

涼しさよ桜もやまぬまけ都

厚きよみぬかうようちやくらかな

利休 居士 宗易

雪もるも笠きてゐよ心業ある雪

澤庵 東海 禅師

何もなし口の所院代衣なりけるかな人

サヌキノ国ニ
宗鑑の一夜庵ニ
とゞまり
四国の人々庵をむすび
門には狂歌を
も常に置せり
かくて数を積み
けるに 宗鑑辞世
其の頃 其弟子
出て法人に挑を
示し鑑をあらはす
数も間近ぞ

手本可レ賣
竹林不レ賣
といふ事をいひて
扇かたに認て價を
取て世を渡る
さらに絶えしかば
とまらず

誹諧
宗鑑 山崎
疑源抄ノ中ニ此
脇句二百句アリ

ゑんけいもうしや霞の衣は
衣川ちの名とろくその日や
手をついて哥申あぐる蛙かな
この外よふ下世の挑
清水寺又こりて菩薩なり
春さむきとし
まかしいつまで鳴ふきのたう
竹の子のあふきをし親のかな

又庵の額ニ
上ノ客立帰り
中ノ客日帰り
下下ノ客泊り懸
とぞかゝれけるを
よめり
おかしきことを言
けり 鑑
上ハ早く中立帰り
下ハ泊る二日と有る
ハ下との下の客
と阿者の境界を
読ひとつとぞ
なり

霜月や落葉や松ふく
清見寺雪の花葉庵の杏
辞世
うしみしや此里まよ出て行
みやこのう清あいなき行らん
辞世
宗鑑をいつくへ行と人とはゞ
ちと用ありてあの世へといへ
天文十二年八十五歳ニ而卒

飛梅精吟の句
誉ある発句也
ちる花をと
き角雅俗集にあり
野子辞世とあり
此集のあやまり也
非識の辞世とて
何そ此さうしを
みるむつき只アいと
歎募してうちお
とろきかうち夜たちぬ
まさ或さよ精舎ニ
其の評奇なる句
やと此説可然
そうら辞世の
うたそのみ
守武の師延長八
のしくいせの人
なり

守武 荒木田

とむ梅やかろ〱しくも神の春

ちる花を南無阿弥陀仏とゆふべ哉

青柳のまゆかく岸のひたひ哉

かさゝきやらふ久かたの雨の川

辞世

こしかたも又行末も神路山

嶺の松風〱

天文十八年八月八日 七十七歳ニ而

卒ス

せうくとも
まこ都の曽我なる也
わろこの作のを
編者もしとなう
一こゑ
来つるまた作者の
の句集の肘のうた
とみや蓑結和尚
のうき世の哉り
わらふうかのうる
をらむひちうへて
の作らる趣
し
うふあくるよ
玉海集まい如此
大子集うには
めきそときよりて
くしおりぬ衣かへ
となり

貞徳 松永 逍遊軒 長頭丸 氏
延陀丸 明心居士

せうくとも赤宿やさんけさの春

梅の花貫一乃ゑひの香

うしろ髪ひかるゝ道の柳かな

一こゑ手わかふ衣やきれのくも

花さかぬ木もあるを咲さくら

うふめくて見るくらし八なし衣かな

雪月花一度にみする卯木哉

まとて読は郭ひのかたき有様

不殺生戒を

今ハこゝに[illegible]
あつめてこゝにうつし
こゝろみにしるす

貴[illegible]常ニ水すゑて
つくしける蓮の
法柄をもて[illegible]
こしらへ[illegible]の[illegible]
[illegible]の名をよび[illegible]
[illegible]

御不拝
寺所の御祈祷にて
ありし[illegible]
この名ありとそ
申つたへし

乃ゝ数をかさねて殺を戒てハ
蓮の葉や生実達のかくれ笠
似ぬハ葬の花の[illegible]
ものいふ口やさくのみをとゝへし
野の路をまはさけてきく虫篭[illegible]
七くさは集り野を花ノ青ハ那
さゝむ鮎の水をとる石や剃刀砥
若葉まで又花をとゝるさくらの[illegible]
道甚りいさる蓮 専称寺
金蛇院へまいりける

当流も
宝家つまるの
法誕生出御祭
も行ハしたとし
まさに足利も日日足
宝家つ小宮山
山荘あそんく
[illegible]の[illegible]
玄宗の法服幼
や彼つの法再
誕とうはこゝろ
ちあつくよし

日光當宮の御名の持ち中
出さし乃拜く
御不拝ハ指見さうそのかけ那
極の末やさえける鶏のしらね景
當流も宝家も八月ちひら那
色るのなりくいつかもこゝらの家
とらかしと来ハ流る一ノのくろ水
霧や[illegible]名月をまぬかれ
西ふくハ達广の息気伊沢の風
河内とこらより[illegible]

おもしろくしの句也
先に氷のさゞれ
芭蕉のむくげ
いつ頃もこの句
ぶりに似たる
あらく見ゆる
也

おもしろうさらさら降るや布袋さん
うき氷るや障子にかいや河
風うそんのうちも寒也と詠みしを

像賛

仁王のちから我法の門をかためて
月をとてたらし茶とちりさし

辞世

露の身はきゆるところもおなじ箱
かへしむかしぬ夢のゆめろん

承應二年十一月十五日九十四歳而卒去

貞徳門人にて貞室ハまた
の門弟也これはこれ
やさしくもやられ
けり茶の解を
ゆへ見ゆると
なん

貞室ハ琵琶を好
みて平家をかたり
あへ下りられ
も琵琶をとりて
あちこちあるきと
うやよしのかし
まゝ何の是句も
かし旅のときに

貞室 一嚢軒

京筑式ヶ宮あまりやまさの春
これはこれはとばかり花のよし野山
たゞありの月みよしの茶やみしの雪
いさのかき浪ゑの鉢たゝき都る

嵯峨身すて

おもしろうさうしさばくる柳かな
隣家の人来ていふ物あれたる
かくのしらしらしくそとむ
十うるゝものけむしの声

貞徳ハ貞室貞恕
それの門の主とさう
恕ハ門人貞徳ノや
らんきうしハれと
読のさらとなし

住口上人ハ芭蕉翁
もも在るれ人之
き角雑談集にも
上人の弁ありまき
紀行の佛句吟
の不紀より
宗かよ雨中起
やとり夕あらし
ともまさく
ふう

山路ては酒もちよき菊見への郷
雨雪月徒をかくすりふの月
よはひ六十四にして卒

辞世

なまても見えて世移るとも主人公
八々とひし年もあきふり

住口上人　伏見西岸寺

門の家乃佛ゑみし辞世有
大のうへハ月をもあてし　七十二

忠知

忠知ハ古き俳翁
ちうさ紀人正徳
頃とそつけし人之
翁もこともの
を常有　嘆美
ありしとや

そのほか白ススノ
忠知とやかは
ゆうとう

古池や蛙飛や
とも書し諸ふよ
一説晋子山吹やと
配りをし
いつれましても古池
の二字妙境や
父母の句之

えりや何ふことつん鉢後しめ
何ころつめ去年せす純ふ
白炭ややぬむし雪の枝

辞世

宗月やあるハ家にあれ新法し

芭蕉翁　桃青　風羅坊

ちなみ神や名をなゑ山は胡ゑと
またやうし紀にの月にか梅
古池や蛙飛こむ水の音
父母のしきりにこひし雉子の声

芭蕉翁　晋子
雪中の翁とも
[illegible]よりて
[illegible]
よてめしけず
あけて年ふられ
[illegible]し
[illegible]池合歓堂
石霜庵も名をとり
わかし
[illegible]正風を
[illegible]
翁の絶後三十
年にもなり
門に入れと
流[illegible]と

郭公啼／＼飛そいそかはし
さみたれを集めて早し最上川
やかて死ぬけしきは見えす蝉の声
秣負ふ人を枝折の夏野かな
なてしこにかゝる涙や楠乃露
夏艸や兵ともか夢の跡　奥州高舘にて
たふとさに皆おしあひぬ御遷宮
よしの奥に宿をかりて
砧打て我にきかせよ坊か妻
蛤のいけるかひあれとしのくれ

續扶桑隠逸傳にも芭蕉翁ノ傳あり常ニ愛ニ荘老ヲ専ラ事ニ参禅ヲ中ゝ庵中ニ筆硯の外さらに餘長なしと

山路来て何やらゆかしすみれ草
世を旅に代かく小田の行もとり
荒海や佐渡に横たふ天の河
ひよろ／＼と猶露けしや女郎花
雲折／＼人を休むる月見かな
ひいとなく尻声かなし夜の鹿
庭はきて雪をわするゝ箒かな
あか／＼と日はつれなくも秋の風
みちのへ乃木槿ハ馬にくはれけり
枯枝に烏のとまりけり　秋の暮

東行からしろ
むきの像に賛を
のこされけり
翁
こちらむけ

芭蕉翁か文庫ハ
序にいはく只
宗祇のやどり外
とあそばしたる上
紙と壷中に納め
その塚のあるし
とぞせし 下略
深川ちかき
ありむ其角の
墓もむかしごて
そのあとや見

こちらむけ我もさびしき明ぼの
明ほのやむかしも今もこの秋月
まつのくる雨の佛ゆかしくて
世にふるもさらに宗祇のしくれかな　イニやとり
酒のめばいとゞ寝られぬ夜の雪
雪ちるや穂屋の薄の刈残し
いかめしき音や霰の檜木笠
あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁
風の身ハ淋しに似るうきなかな
葱白く洗ひあげたる寒さかな

を世よ三居士の
墓といふ
ましく国に
十ケ所あまり
翁の塚作り
くし中にも
それの卯笠を
こゆるも笠塚
とかくんぬるも
なつの、し
短冊塚ハことの
ほかんまと
ありけり
発句塚とハ其
にいる深川
にある其角
墓をいふや

座右之銘
人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ
ものいへば唇寒し秋の風

其角　晋子　寶井　宝晋斎
人の世やのとかなる日の寺林
ゆく水や何にとゞまる海苔の味
明星や桜定めぬ山かづら
あそゝ雉の声落してむるつゝしかな
ゆふさらぬ洗ひ分けたる土の色

句又共ニ
名の月と又一き
る山猿呼肖音
と作なるあ
るぐき巴峡乃
猿すもて岩ノ
月とたやうな地
好なり

ゆふぐれや十月廿日
崖岌枯吟や
帆うけ舟
湖上ゑ吟や

ゆふぐれや蛍ちいさく枯草の
水世寺ゑ寺乃舎あうりゑの月
名月や夢のうつり雲の影
名月や五湖乃ゑんと死ふと
嘉ゑ水ゑて猿の遠向し岩社月
そつ松きよ人ものをうふしゑ永
さうゑ山やこゑ酒の夷講
帆うけあ秋やうゑ田乃ゑうき
こゑ〳〵ゑ寝覚ハやうしゑうゑ紀
子とゑ〳〵ゑいうなつ〳〵とものゑ

さゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑ
世人ゑふゑゑ
ゑの 選ゑ名を
ゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑ
俗準之

嵐雪 石中 雪中庵

えりや時て 薩乃 ゑゑゑ
蕗のゑゑ ゑゑ者て人の絲色ゑふ
好風の心ゑゑゑゑ 縛すゑ秋
つくゑ本ゑ糸をゆゑゑや秋の風
名月や柳の枝をゑゑへふく

一西賛

今ゑし年寿ゑゑし結ゑゑ

辞世

一葉ゑ秋 吐一葉ゑ秋風乃上

年くや　沾叟
先年予か別荘、
あそびにかよひし
ときの知己なりや
同席　沾洲房今
は雪風藁
とよく契茶の
酒友あり
笑疑亭とも名つ
けゝ七又自嘯
息し祈や

沾德　合歓堂

年くや鷹ぞくまぞ家はわすれ梅
さゆり葉ふまたし好ほや昼さかり
盛れ菊の売しむる宿し彩の雨
落るをと下葉ゝ寂しや菊のさ海
煤ときに毎あつくされ梅の花

祇空　青流洞三幽居士　号敬雨
石霜菴　玉筒山人

はしめて都にもとむくりし時

居士いつもし
もや住吉にて
梅咲の千句の
巻頭
大の御や秋立の
眼を
筆とめし

えもらせちさいと優萌なりけりや春
世の中をうら家は春の野にも牧乃春
鶯の梅を離れていつ桃の樹
花盛を桃よりやさしつ戸庇
鶯鴨の宿に遊ぶくゆく春の水
雀子や縁よりゆく岸乃艸
初月のさしの用場をかへの秋くさ
又菊葉高きに逢の奥をとえむ
早雨奉りもりのつきと
きもれし夜ふて

石霜庵九景

南屏鈴響

栄峯落照

塔峯積翠

湯村煙雨

双溪長流

鶴橋月人

題　涼見船

岌堂晚澄

城嶺霽月

双乳雲雪

寒中月

半雲ノ額アリ

尖山雪霽

志乃川波

志乃伝を尋ねる人（私考アリ）

つるぎ

手冊くらべ

さらしなの

摘骨とかつやとわらひ

奥しらの

（私考ニ面白ヤ此ノ波ニ乃寸ノ白也）

ふるのくもて

保ヶ瀬の仙壺乃名ところ川

松ヶ崎の波ところゆくえ

廣井六物

井泉歌

詩瓢

弾足真汐息吟非俗
肺腑

陶硯

天倍閑日月

柱杖

独岩乾坤

なくさいてくし烏帽子
ころく塩漬のさ海老さくらの鮨
いとまなきもとあくれば見えく
塩俵すこのくてゆ遊きうく
胡麻やりを敷きく毒ゆ摺
むさし野すあをひて
ゆくや国をまきまの写中士
あのくもや物もなのくし唐ゆ毒
四くくしてゆと命のあらん夢塩
花をれかくぬ裾や岡り松

竹

釜

已上

陀代中

笛ノ上

リモカメ
敲空ゆ響
手ゆ無蠹

四スミニアリ

仕くしすて
名月やゆくくくる海の雲
河を人世を命ゆくくの月
湯本芋蔓鶴鹿三句
暮
くくる蕪命り結ゆ十文字
萩
をみ出くや焼死をわくる鹿の毒
曙
鹿をくく一番ちくゆ之蕪

これ此ほとし
本このしやし
此二句は居士集
東武へくだり給
八幡坊にて
のみ給ひの句
なり無し
又やむ年
かとまもこの愛
竹のよみ所
をうつし竹堂
と号すその
手に竹尊者と
いつかまた
阿業門とも
紫竹道人とも
いふ

こゝは山のみふらり　郭公
猪追ふや秋のかしらもちちる

湖南亭主鄙吟

江を隔る鐘もいつ秋九月尽
川ふとり松の葉落とふるかり

豆列早雲寺宗祇師の墓
前におかく蘿髪の時

我影をかくす寒月すゝ石の上

雅空

宗祇もさむきころや一晩の宂

六とせ故ありて
しばしきこし
有年ゝ庵のあとは
弘福寺の末へ入
寺ハ国家と成り
てそのあと只今の
所に在
善提庵
八千庵ともいふ
まことにしころ
あかり

吉信ゟ図せし
かゝるの賛あり

一道まへ隣笠木や帝国の落葉搔
雨ありしやわかつ竹のゆく遠へ

廣徳精舎は縣廳やしに不
忍の池のほとりにありしと
宗乃禅寺いゑ名の枕乃上寺和尚
より給

水音や山をうちぬく夜寒の声

庵崎乃有年庵とよみける時

夜の月とをみるや　ゑ嘉　鶴

[illegible]

[illegible]

[illegible]

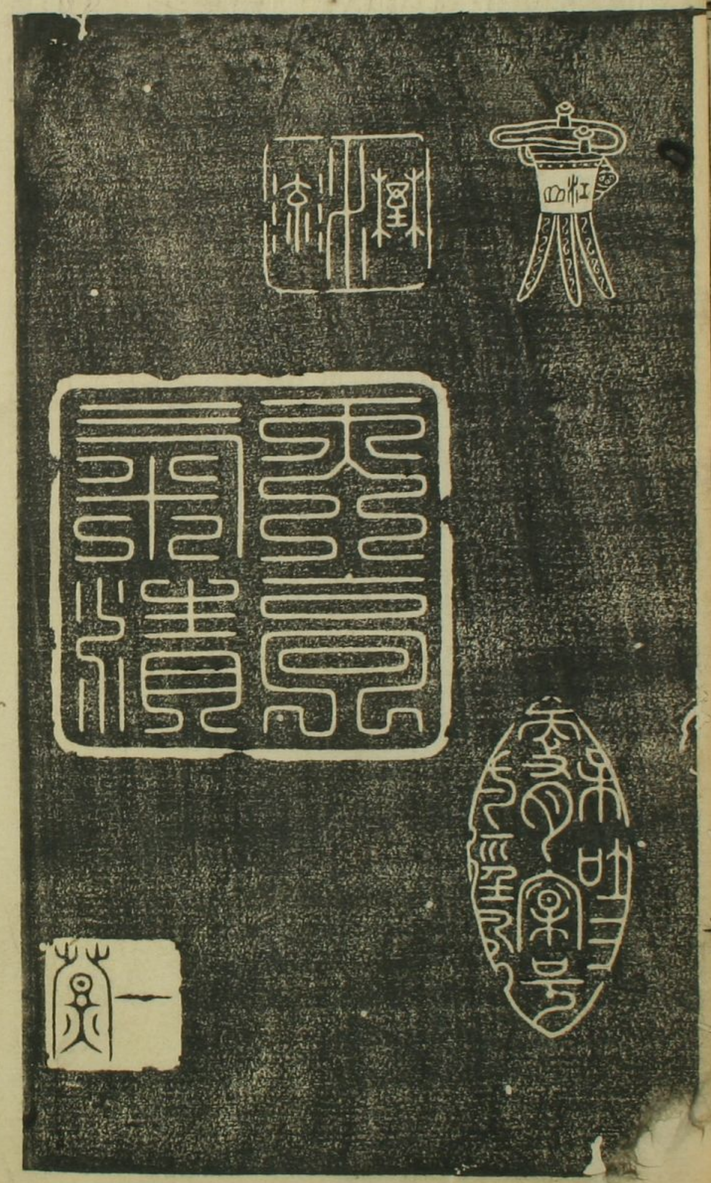
立圃 宣賴 西武
季吟 良佐
宗因 芭蕉門人
素堂 玄黍 氷花
琴風
等ハ後選ヨリ
ヒロウ
コノ選ヨリ
ヒロウ

遺偈

擧手動足　平生神通
鐵牛破裂　音信不通

この子を産んでは産んでは死ぬるも
既に生まれしの極楽地獄

享保十八年四月廿三日　七十一歳而卒



說學說類

孔曰きいろいハ哥を歌ひまいまをすることを
惜くゆるしてゆるしたものを也の間さ
ひとつ心をしてゆ侍ひ事好く荀子ゥ飛耳長
目ゥ道とハ一ツ手ひとし或ハ見あるハ西
湖平遊ひ又ハふしを惜ひなのゥ格
為えふし跡を今見るやうにうん他ひおして
いつゥ行ゥ為ひ書思のまゥらおの心をも知ゥ
さゥ行ゥ老の中ゥこゥ月をまゥ待ゥ道
教ゥ心教僧都 ひ考 述懐を心初乃者と

[illegible]

[illegible]

[illegible]

間を中とする事を辞世
うゑさるふるさいはしくさ刹さ〳〵合ふ法歌
ちてるも変化の乃地和学ふるてうれハ仏の句去
古歌ハ何句後くとふ法を立てり実よさ〳〵合ハ
変化のてる乃地と知る時ハ毫論なくしてる事
更芭ふ言ふもうるふつ〳〵平句ふするハ
発句とうりてくふけ高ふけるも去いてなるふ
いうふるる人の耳てもゆゆるやうよ仕立る事ふ
地ふてくふ事ハ四道千限ちてる句く奇ふ
附合をのつるいで来ぬるる〳〵故事古歌

取ふ歌ふ句ふ祭を句ふ引用ふて事
うかちふを一ふふ物語ふ句ふ似ふり句ふ
ふて故事古歌ふ物語ふ句ふ
ふてふんふふて自然ふ説ふ
て長ふちふ一物ふひとつ〳〵て私
事ふ事ふ不孝不忠不義非道の句ふ
くふむへ〳〵性吳乱世火事屈ふて吳ふ
ふ得ふ人〳〵神秘奇道ふ伝授ふ
諸家の秘事を代の貴人ふ伝名ふ
今ふ人の名元二十年来ふ事いつ

古人のいましめし所や是を以て真法に教
ふるし也と云ふ事ハ俗談平語を正
さんと欲也と教ふる我道も人の古を学ぶ
学ぶ所をもつて魏魚の肆よ居るものハ
その臭き事を忘れとやうの所のこと
さる物を師ハ先ッ師をもとめ友をもとむ
事一大事也師ハ学ぶのをもつて友の助けるもき
ものハ業就きもつし独学而無友則固陋寡
聞といつり
一説仏も言文辭を用ひ詩歌連句三道も

こゝかゝくの如し道ハ真法にありて句ハ芭蕉
にあり我〻元孫の法芭蕉流の説集をこの
ごろ言文辭とさだめし古れ集ともに熟
せる物を古雅を志ゝ古文守武宗鑑真法の
書こゝる言文辭也我道も対運乃ゑ伝ふ
ゆ用ひること辭もほゝこと伝ふ也こゝ古人
一事もいひ残せしるあんやる古人の糟を
なむ舐るものハ也世外に道ハ一辭を七と句
先奇をもつて言ひ人のいそこゝる事をと句
仏ゆへにおのつからいつるを楽し又説

し紀年落て邪路に入る也といふべし於
吾を原の羅の紙うしの新無一古て
吾師がいつる事あり
うがの紙に曰むうの乃祇借ゐ姫るしく
一句も云出がたく古人こゝろをきち
み句に痩くしむる事ゐる事ゐや意
ゐ無尽ゐ古つくるなし正本のつら
ぎぬこめしあり今の人ゐ初心より句
ふ善悪がなく かうとそうおもひとりて
日ふ練月に於るの心ゐくゐやふ入ると志す

都ゐゆゐに立物の心ゐしゐ年を於ると
ゆゐに書海言ゐいくゐぬゆゐおもしろも
さめやゐしゐとゐ
右詞書ゐとりつくぐ子の名ゐ於ゐ居士
いゐ人を立ふ事近世後古がの中興ゐる
ちのこゐ東都ゐ又子百番ゐ句合して吾居士
石霜庵師一評をゐひく剞劂へあゐ書世
こゐ於をひさくゐ於評の評ゐる事古人のゐ
ゐ於芭蕉湖葉詞和素堂つゐ於ゐ系をそし
ゐ蕉合四人吉句合題栗合とゐ乃句合等いふ

古人の高評あり今引合て其士の評の俗
[illegible]事を見て居士の居住いまゝ知るべし
人も多く[illegible]いつれの比か浙西の沈学齋
とゝふもの崎陽に来り遊ぶ時[illegible]居士
の高風を慕ひ[illegible]書あり此ぶし
を予よみて[illegible]今こゝに[illegible]
いまゝ[illegible]人をとゝろかす

奉贈洛下
青流洞高士
予薄遊海外於茲三年矣陰ひ求天下奇士渉

宇不可得有告予者曰去崎千餘里地名洛下
其中有隱士子出爲秉心曠逸於物無營視名
利若浮鷗棄家室如敝屣結廬名山於雲霞
之巻舒禽鳥之飛鳴以及春秋冬夏林泉之
變態有心於心輒倣然其自得間者興之所
觸即命駕出遊雖霜宿晨餐弗辭勞瘁一
要以窮極幽奇作飄然遐舉之想不謂超
軼尋常之萬一者與予乃蹶然而興嘆曰然而嘆曰
逕宇世人勞攘囂囂有寧宇跬歩舉足使安是
想不已遂成奔逐乃至一切身後諸緣如夫

原不可撲滅彼君子ハ不為利鎮不為名
漢泊明志超然物表雖淫之在山巖道
阻且長洋徊告勞風景仰持贈言不我遐棄
何孫覬面

浙西沈學齋幷撰

一俳諧俳諧の論古今まちまちにして真実ハ言葉
宗因ゟ人篇芭蕉ハ人篇ハ芭蕉のみ我用ゆ
とゝ言ハ其ハ蓮門の意あるいハ何ぞ
同しきもとゝ大ぜゝ人ゝ為ぞ不為ぞ
真実義を為ぞ言葉を為ぞゝ言ゝ

雅を主とゝ幷ぜゝ事ゝとゝ我ゝ也俳諧字
史記索隱ゟ滑稽ハ猶俳諧といふゝ詼
諧の音也 斐の音也と爭論あり古人も
いつれを是とゝ我ゝ定めがたしとも
詼諧ゝ字ハ貴ゝ古今集ゟ新てより世ゝ
和歌ゝ外撰集ゟ多ゝ俳諧ゝ我
朝の京ゝ集ゟ多ゝ俳諧をすてゝ何ぞ中華
漢ゟハ中華の書を引事ゝ定ゝ幷ゝ
也や漢和ゝ俳諧ゝとゝハ人篇もこの郷

又八雲御抄或説曰俳諧有種々一俳諧
誹諧三俳諧四滑稽五俳諧六謎字七空
戯八鄙言九狂云々こゝろをもてこゝろを入
篇中にこゝろ篇中門をこゝろ名也事吟理本の位
俳諧八解也心也ともに物云也俳諧八解物云也
して心ゆゑにかゝる也八雑也忠也物云
ゆゑ俳諧なり心也ゆゑにかゝる俳諧の俗
なり八事吟増山井字季子詞奥書も俳
諧こゝろ紀氏古今集よりもこゝろ篇なる文字か
ゆゑ只言篇よりかゝる也とあり又季吟

師先有乗と以前集より字訓かゝハ宗祇
法師也ゆゑ宗祇と云ひ始めて也
ゆゑの名歌所とあり而あやまりつゝ
歌所とゝまる法筆の序と俳諧
いふ文字八唐物ゆゑ也ゆゑ方を足誤
てゝ是ゝゝ歌所なる説接ゆゑ人篇を用ひ
といつゝ物中ゝゝ物ゝゝ行也只作ゝ也索
隱ゝゝなく唐の文ゝゝゝゝゝゝ
右説諧ゝ二字も唐のゝゝより出ゝる俗者
貫以漢字をゝゝ吾和の和歌ゝこゝろをゝ

らてる成句し文字法體をすてゝ何そよ
事法用を爾こんぬよしゝ詠よ八の音な
きとゝ八やとかヒカイと唱へても作るよ害ア
和歌さんちる時ハ八ハ八言八非よ
字義をつふ時ハ八人八非よりハ八言八非よ
況も言語作る地命ハいつまゝ言葉の可日本
法意をもらし命の民和歌三神の法とわ
みもかるか爾
詠諧の別名を狂歌とも狂句ともいふ也

歌平狂哥者ハ連歌も狂句あゝ人も義
法義八狂句者のゝしゝとゝけうつゝうれ
素堂八狂句久ゝいうれもとゝも志ゝ宝
作法と狂連歌とも狂句ともいうんのゝ
うれゝも有ハのゝ法滑稽というんよりハゆゝ
ゝ法作ゝ地
一難波江の葦ゝのしハもにうつゝ法あゝさゝ
山法いゝ小者ゝ狂ゝもいゝ狂ゝ
作古徒の要言を作る地語影と名つく又
私曰法章詠諧文字雅俗ハ俗史を中平

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

要言ハ貴し

享保甲寅仲夏

水光圀祇德謹識

流学語類

後学　水光圀　祇德選

書林　生白堂　歓之梓

一宗祇曰流儒者非道教道非正道進正道也

一又曰さいのいはゝ事他流儒者あをいふもよくいふ人のあゝぬ事をいふのゝ志うるよくいひうやうし

とゝ当流ゝ不用之

一宗祇雑談ゝ上手ゝ者歌ゝ他人の中ゝ紀ゝ[illegible]

ゝ下手のゝ歌類の中あきゝ志とゝ[illegible]

ゝゝ[illegible]

一或人宗祇法師よりあひて言奇特やうハいふ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

てよ。論語に仁者ならずして富貴なるは我に浮雲の如しと云へり

一貞徳曰 根本三教は五経のなかにもとづくものなり 孔子の門に三千人を出だす 天下を治めん為 治の道をとりての人倫教誡のそしりとする所なれば なんぞ花鳥ばかりにまどひ用んや

一貞徳曰 物ごとふ人は乃の字かを知らぬ事なり 一字は所詮なりとも 報恩樹法のこころざしを乃ふ 扶桑一日の光は沙道理をこそ名いたしおもひしかども 世はひとふしき事なれども 茶法こそ水くむ事もなく作りし所業おくのうれ

もの也 又法ならく 先非をくやむる一切の書籍見るふみをもあるいは見聞みもいろいろそのまひらさこそ孫義事あるべしをのうちをもおしあやまりの作を其作者をそしる一書あるべし祖の人はさのこそ為る事あるんや

一貞徳曰 世間の人 誰は上を 誰は下をそしりそしることを為る事 丁そさらすそこもあ事なれ

三教異同くみ口ふみよりもくち中事なるべしうやうみとてよりあるもあるべしもあるべしもあるべしうやうまてよきといふりてあしきとはきこえあるし

と中分をありわけるに事に成ぬれば名よ
よりて善悪をいふべきなり
一季吟曰筑波乃云は業平が雅を俗にとて
中俗にあらずもの[illegible]なれば乃云
[illegible]人の[illegible]も花車なるいひぶり
ことをあつかつのちいうまねて俗にらしき
無とあるとむしの[illegible]なるし心と業ハやう
くに唱うしもひいやうの事のを教ふ
よ[illegible]つくかく[illegible]と云業ひら云業はなを
[illegible]よりて宗鑑法師犬筑波をあらしと発し

よりこれらを笑ひを俳してをさんしをかれ事は歌の
体よりはなれぬ
一季吟曰花咲の翁は乃物語を紹巴法眼老の物
よりの付句ともうけらつさんとてくらべ[illegible]
のふ何ふ[illegible]ひとあぶりとあらんかし志い
さも[illegible]なりよりこそうつる物
くはるるとはるふ[illegible]よりとの吟[illegible]
かあるつまも一度の物[illegible]
[illegible]

作らし

一季吟曰滑稽連歌寡小粗云待程うすしといへり粗云ふ
ともふよりいでるわざなりしかし洒心をえさらん人の
こゝろふかまるべきさらんハ俳諧の事ハみな俗なれ
ども事ハいうてゝ色ちるべきさよりくおもふ所きこ
とゝり成へし

一季吟曰滑稽ハどれもかくかるくなるをもてこゝろ
作意ハ高雅のうちにて おほつきなるきびやうふぜ
なもしへしさるふるいのいハ連歌よりもひろき道にて
作るあ意 付作るんてゝもたゝかゝるぬや長頭九も

さのこゝろにてゝ乃ゝ多ひしゝうさりとて前句ふせんるき事なと
一句をかさらんさめみ事おほくたらんハあやうきさうふ
こゝろて作るへき又ゝ文ゝ又ゝ付前句をきゝ物をきゝ
ゝ付ゝ所ゝ多ゝ所ゝ

一季吟曰いろ〳〵ハ大ぐちなもわざとこのこゝ作るし
大体くゝ集ゝ所ゝ作る真俗ゝ人ゝとゝ所
くゝ事ゝひを作ゝ作ゝ作ゝと云ゝくゝ
さゝ作ゝ作ゝん

一芭蕉曰滑稽ハ俗談平話を正さんゝ為ゝ

一芭蕉曰佛ハ広大無辺儒ハ庄子あり道ハ
實有を踏ざるまいい事もの[illegible]と
時ハ常ふ反て道ハ合ふの乃理也[illegible]
道ハ素質の次ニ立て心ハ向上ハ一路ニ趨ふへし
と云

祇徒私曰芭蕉翁二十五ヶ条ハ門人去来ハ[illegible]書也
要言多しとハ芭蕉門ハ俳ハ所のもの[illegible]
むさと[illegible]もやぬなきに似ふり
貞徳翁門人　立圃　宣頼　西武　良徳　貞室
李吟　いつれも此人ハ名ありとハ[illegible]

師ハ立圃ハ自己ハ門ハ松江重頼ハ維舟と
名あるあり晩年ハ[illegible]ハ[illegible]
西武久流面ハ功あり良徳ハ天小を賜ふ琴[illegible]
あり[illegible]門人[illegible]なし　貞室ハ[illegible]の
[illegible]議[illegible]貞室[illegible]貞恕ハ[illegible]て
貞恕ハ[illegible]ハ何そ二師ハ[illegible]
貞室ハ家ハ[illegible]李吟ハ家ハ芭蕉ハ[illegible]
[illegible]を[illegible]
と称[illegible]
翁ハ俳諧三代ハ宗匠と[illegible]

一負徒曰あまりかゝるたゞ上をもつて小さき和歌
ゆゑあまりかゝの打ちに入くゝ又星ちのきうたゝ
一立圃曰説俳の連歌の心打付やうとゝ其の連歌の
事明〳〵説俳うたゝ連歌よりひきあらためる木為
歌墨付ホ又ハ詞の続をのひゝゆるゝりや心を遣
てハ前句を付つきやうあり〳〵詞いうさ為ゆ〳〵けよ
いしをしてもしも一句を打て解付んと思へは心ふ者
つあハ付くふあるべし
一宣頼曰百韻連歌の内も説俳体とゝ女ゝ有之よし
俳〳〵説俳ふも連歌体之へ〳〵句なゝ打ゝ有り

やうゝ時ハ連言いきにくゝ為ゝ説俳
あやうきゝいい付よりはさるものとゝ
一宣頼曰梅桜桂花花ゝ年ゝ抜くの私名者又
新地の寺社町里付名或ハ器物木此外なふはのよし
あゝき俗語ゝ付ていきゝ一むしふもなゝゝ事を
いひ出るハいくゝ付くん思惟〳〵為ふ為〳〵
一宣頼曰俳ゝ付事古紀新らし紀なゝ中ハ耳あるゝ
といきゝ耳あ説ねをもつて大ゝ式和為ゝとゝ
句作出来付くハ先ゝ白紙俳を紙此味ゝ
其ゝ〳〵高ゝうゝ出紀人い説ゝ木紙をの連歌とい一利

花の作言とおもふ事よりは人書紙部をよいひ人
甚多 詩人ちかふとも心いのちつかうハ詩なり

一室頼曰人名より多き懐紙をとる生状祝儀とて兼代
より蝶ひ結ちよし次の付句をとるとあやまり和歌と
人名を面へあらふ事ハ紙句作みすてをかふ
ふ紙をとるしほのあるしるを和しゆしる紙

一徳元曰祝儀ハ生きものをとんはれとんはれ乃
人名を付の発句を一二ハつ加よ書ちくたしるむへ
し人の出ハ名を打前ハ名しくあんへ作るを心者
又いとふ作をよりと前ハ出来あるを

あ也をのりとハいへとも甚意よりを兼載をの前句
兼を付又ハ何すてもめつらしき事作ハ異ちをと
句をもも前言別姓の句を帰へ一接ハもはしるへ
ふんや何事を付ても心をつけのとを井也

一徳元曰宗祇ゑの角田川より哥ハ十躰を出ハ雅を分て
後るり連歌ハ西道といつも十雅ハ和歌ハ
一躰とハいへとも二躰あり一ハ心のをいを二ハ詞の
をいを也心の祝儀をハ一躰不あれ詞のをいを
を次手也ふ祝儀をハ

一法元曰祝儀ハ連歌ハ
法の外手五つ内ふ

たのしみとなるべき事、一宿徒を用る事、貴二八自能
し作りてもおりしも書に貴二ろあつて無くとも能し作
貴四初心の輩ものやもすれば古のうら徒に心を
よせ作る事、貴五ハ歌学古事来歴を明らめ作
とも一句にさへ無をたしかに作ること何事をもひろく引き
て付合ること肝要なる事、貴六付合の事、貴七
一徳元曰俳諧も和歌一躰なれば道まことなる儀
ハ仕まつるべからず親子輩中うへ懐紙をかしてよこ
にくまむるうへ万ろの句ハ斟酌すべし又一ういよ句能
我弱輩に成ぬ年たしなみ作るべきなり

めでたい百韻の中一句なりとも向ふ之句も十句まで
つとめるべ和もしろ為もろ所の
一宗因曰連歌ハ京迄年出ずるつゐるおそろしきの事
所詮乃判者ハ毎ゝむつかしく花ほゆる
とも

たしなみ合ること

一貞徳曰兎角句郷まよつくまよつたのさか嫌ハ勢もの
也一楽ゝて不可論あらそもをやめるべ法度を
結て合点なき人の所ハ道理をもて法度をあ
らぬの武因乃心を叶しるべ成一

一芭蕉曰俳諧さまざまに成て一句に好悪を論じ又指合
ハ後の俗義成べし指合変化の百体[illegible]
有を知るべし変化の不自在成事の指合の按ず

貞徳式目十首歌

俳諧ハ武国ゆえ元来
ゆるんのごとくきらふべし
わうんみえ事寄恋懐旧字
連歌のごとく長句つゞく
俳諧と古体五色句
七句五句ハ六句

名所国神祇尺教無無常
恋懐懐旧物語
小意中又山類物語 雨無
連歌のごとくきらふべし
鬼女虎狼 物 十句
面 月 花 物 一度一句
新式の一度一句と二句続
二句物語ハ三句迄
三句物語ハ四句迄 四句の物
両句ゆえ

新式ようらと雨代曙ふ宮ち
ちいいとていちかきへし
連歌ふとやぬしのなやを古事記
けやけきい分ハ一度一句ろ
貞徳ハ連歌ハ八ヶ十ケなと賦あ井と能ハ百韻
あ、のち俳言ろて紙ちる連歌なれハ猶法ろ
俳諧と連歌とまつ風りこれ爰恵懐四経文名
ろ〻連歌ハ乃心ちい也
正保三年三月十七日拾花咲亭定之
こ所より貞徳の家流ハ紙あ井し

松永貞徳翁省像

祇徳謹曰説話古學ゝ家ゝと建ゝ事ゝ私ゝ曰ゝ此皆
古人の教を信ずる建流派ゝ古体宗因芭蕉蕪村
角のごとく似ゝ非ゝ一家ゝ高根の月をのごとく一ゝ外の諸家
一家ゝ捨ゝ難ゝ一光淋ゝ一是淋
也博を貴ゝ雑を厭ハ古人
を信ゝ其書を取捨取捨を辨ゝ
ゝ古ゝ人を書信ゝ淋也一人ゝ取捨
利一書ゝ取捨あゝ初ゝ一人一書ゝ
捨ゝ所ゝ不ゝ見ゝ

句語選終

享保十九甲寅